

平成二十八年五月一日発行 第二十六卷第五号 通巻第二九九号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

平成28年5月号

岡井省二創刊



桃の花

高橋将夫

良賀忌人間が好き猫も好き
招かざる客が来てゐる義仲忌
田園と言へば美しい蕪村の忌
凧は糸人は絆を頼みとす



や や 児より親が眠たき春の昼
春雨が乾きふくらむ新聞紙
霞へと流れ込みたる煙かな
人がゐて春の蚊の来る仏間かな
よく笑ふ人はよく泣く桃の花
田一枚知り尽くさんと蜷の道
さくら餅花より花の匂ひ濃し

「俳句四季」三月号 巻頭三句より

槐安集

水野恒彦

蜃気楼音の消えたるわたつうみ
真昼野に春愁の影ついて来る
水音の深き穴あり躑躅山
桐笛に臍の緒のあり霾わたる
伎芸天見て口喝く雪の果

加藤みき

百千鳥女子大の門静かなり
初蝶のはじめに着きし石の上
行く春や新世界より駒の音
うらうらら浮かるるなかれ齡は齡
病棟にもとび込んで来よ春霞



中島陽華

南天を抜ける風あり阿闍梨餅
こげざるの茶壺らしきも初弘法
千両や抱いて寝かせて市松いちまき人形
六根の清浄ざぼん朱欒かな
指文字は宇宙のことば初山河

竹内悦子

手袋を忘れ餡かけうどんかな
鉾蔵は閉ざされてあり梅三分
春昼の阿吽の猪よ摩利支天
竜天に登る切符を探しをり
竹箒束ねてありし春の闇

雨村敏子

音なくてこのきさらぎのひかりかな
うすらひの抱きたるものみな透けて
風花や素手で解せる米麴
こつぽりや笑ひころげて桃の花
ぽんかんの臍のえくぼを撫でてをる

本多俊子

楠大樹春の日ざしに父憶ふ
下萌といふやはらかきものにふれ
白鳥の歌ひつつ白こぼしゆく
貝塚に離れ姫塚冴返る
竜天に朱の山門眩しめり

近藤喜子

ひざまづき星を摘みたる春野かな
春めくや身より鱗のはがれゆく
水伯の目覚めし春の氷かな
居眠りをしてゐるらしき大田螺
麩のやうな日輪の浮く黄沙かな

瀬川公馨

大寒の底といふか腹といふか
全身を耳にしてきく春の歌
ニン月のざらつく肌の荒畑
二月十四日虫も殺さぬかほをして
霜の朝聾棧敷に置かれたる

久保東海司

温泉煙りの梅をはなれず夜となりぬ
のど飴に頬をふくらませ雛飾る
韻をなす如く北風鳴りづめの宿
間を置いて軋む水車や鳶の笛
着水の二羽は雌雄のかいつぶり

柳川 晋

日遅れの節分の寿司賢いに行こ
恋猫の声聞いてをるこちらがは
獣は 交み 惑星は 交感す
ふらここを漕がねば天が墜ちてくる
くちびるのやうなみあしのふみえかな

渡岸寺十一面観音像

熊川暁子

冬蜂の身の丈百倍ほどを落つ
陵の背山は猪の無礼講
どの辺がぬくくて春の水といふ
楽茶盃にひびの音あり利休の忌
スランプの見えぬ重さよ冬の蠅

寺田すず江

魚は氷に上り宇宙のただならず
仏頭に容赦なき春一番
水鏡春のひかりと戯るる
猿ぼぼも飾られてゐる雛の段
落椿流るるままに旅をする

岩下芳子

天と地のあはひに遊ぶ春の風
さくら餅どうたべやうと自分流
棹菓子のごこを切つても春の景
大霞して東山隠れたり
春なれや大地の発す大欠伸

近藤紀子

産土の班雪野に日矢差して
淡雪をつままんとする赤子の手
やきもち待つ列に風花ひとしきり
露みそをのせる皿皿選びをる
春燈下伊豫の老舗の包み解く

岩月優美子

立つ波に春めく音のありにけり
誰も居ぬ大樹の辺り冴返る
本当のわたしが居るよ花菜畑
春の夢トロイの木馬凜と立つ
昏れ急ぐ影より朧はじまりぬ

竹中一花

弱東風を吸うてをりけり金の鯉
余寒なほ石塀小路の奥深く
おかはりの菜飯やみどりの濃くありし
会議室に猫の寝息や納税期
石蹴りのあと石鹼玉あと喧嘩

槐市集

後藤マツエ

鬼瓦臙に見ゆる夜なりけり
炭で描く柔かな線山霞む
生牡蠣やじりじり焼ける地獄絵図
冬ざれの野に餌争ふ鴉かな
凍雲よりこぼれたるごと偵察機

阪倉孝子

朝の日にほつこり動く春の土
幹伝ふ芽吹き雨のやさしかり
ときめきのひびく靴音春ショール
花言葉の声ありにけり種袋
マネキンの礎長かり春夕べ

柴田靖子

埋火に命そそぎて今しばし
きはめれば迷ひは消ゆる冬の虹
恋は魔物なれどひかるる冬銀河
思ふことあまたあるなり寒明ける
頬にとけなんと儚き春の雪

庄司久美子

春蘭や錠と鍵屋のおかみさん
二月や雲のポケット裏がへる
遠き日の都はここなり春日影
朝四ツに小窓をあけし沈丁花
髪かき上ぐや篋の春の雪



杉原ツタ子

街路樹に春の兆しや青信号
唐梅の黄も誘ふや勅使門
高層の窓辺の席と蕎麦湯かな
冬枯の木立日の影浄土かな
六波羅や飴屋の暖簾春風に

高野昌代

伏見なる青山飾り午祭
大琵琶の群なす雀初湯かな
身欠き鯁誘はれ茸と佃煮に
初東風や東風に誘はれ北野まで
衣擦れの母の遺愛の初がさね

田中信行

枯野にて生命の証確かめる
オリオンや時空に歪みあるといふ
夕されば一句ひねりて爛を待つ
春めきて運動靴を買ひ替へる
バレンタイン明日は異動の内示あり

時澤藍

草青むプードルの尾のはしやぎけり
春浅し酒饅頭の匂ふ道
日脚のぶ徐々に気持ちちを浮き立たす
探梅や案内は鼻の向くままに
無残なり雪の黒牛日々に痩せ

中貞子

春光の白砂を踏んでをりにける
高僧の衣の雫すみれ草
正座して年の豆手にあふれける
地虫出づ遣らねばならぬ事あまた
羽二重のごとき幹なり紅椿

中島昌子

春時雨勾配ゆるき石畳
佐保姫の早々と来し花屋かな
石頭つつんでゐたる春帽子
囀やテーブルクロスを新調す
目玉なき埴輪見つめる春の山

槐集

高橋将夫選

引鶴のひかりとなりし虚空かな
今生に魂置きて春野へと

岡崎 犬塚李里子

真菰の芽ここから先は神の域
恋の猫ドーナツの穴の向かふより
光陰のしづかに流れ木の芽雨

早春や天のどこかでオルゴール
大阪 有松 洋子

天空の小さきドアより春飛び出す
春光のかけらをふくみ口甘し
山を駆け野を駆け笑ふ春の
しやぼん玉割れて吾が息風となる
多喜二忌や未完の完もありにけり
白梅の長き命の力かな
明日がある雪割草の咲く道に
渴愛が割愛となるバレンタイン
日常に葬式のあり目刺焼く

江島 照美

大平の世や葉牡丹の芯ゆるび
水ぬるむさまざまな物浮いて来し
冬耕の土塊赤きひとところ

寝屋川 前田美恵子

春の風古祠に息吹の戻りけり
大寒の水や一指を寄せつけず

春泥に清き言霊拾ひをり
撰津 中田 禎子

春風に匂ひありけり磨崖仏
春シヨール心の色をまとひけり
春一番地球一巡して二番
啓蟄や海底火山広ごりぬ
北開くハミングの人通りゆく
ものの芽のクエスチョンマークの形をして
残る鴨水の輪ゆつくり広げたる
天網に飛び込みさうな揚雲雀
雪解川ひたすら海へひたすらに

枚方 中島 昌子

銀河往来 高橋将夫

恋の猫ドーナツの穴の向かふより 犬塚李里子

恋猫とドーナツの穴の二物衝撃。しかし、ドーナツの穴の向こうに恋猫が見えているという景は決して不自然ではない。要するに、その発想が衝撃的なのだ。

〈引鶴のひかりとなりし虚空かな〉の句、「引鶴が光となつて大空に消えた」なら普通だが、「大空」でなく「虚空」として景が宇宙的規模に広がった。

〈今生に魂置きて春野へと〉の句、〈真菰の芽ここから先は神の域〉の句、〈光陰のしづかに流れ木の芽雨〉の句、どの句にも作者の深い精神の位相が窺われる。

山を駆け野を駆け笑ふ春の水 有松 洋子

雪解けの水が野山を駆けるように流れる景が目につかふ。「笑う」から春の喜びがストレートに伝わってくる。

〈早春や天のどこかでオルゴール〉と〈天空の小さきドアより春飛び出す〉と〈春光のかけらをふくみ口甘し〉と〈しやぼん玉倒れて吾が息風となる〉の句、どの句も作者ならではの豊かな感性で春の喜びを大胆に歌い上げている。

多喜二忌や未完の完もありにけり 江島 照美

形式的には未完成でも実質的には完成していることがあるという。作者は『蟹工船』の小林多喜二を思ったのだろう。第二章までしかない「未完成交響曲」なら誰もが知っているよう。

〈白梅の長き命の力かな〉の句、白梅の方が生命力が強いと言われると、さもありなんと思えてくる。〈渴愛が割愛となるパレ

ンタイン〉の句、バレンタインは幸せばかりではなく、決別の日となることもある。〈日常に葬式のあり目刺焼く〉の句、確かに葬式も目刺も日常といえは日常。〈明日がある雪割草の咲く道に〉の句、雪の間から雪割草が顔をだす道からは明るい明日が見えて来てめでたい。

大寒の水や一指を寄せつけず 前田美恵子

「一指を寄せつけず」が大寒の寒さと水の冷たい感覚を見事に具象化している。

〈太平の世や葉牡丹の芯ゆるび〉と〈水ぬるむさまさまな物浮いて来し〉と〈春の風古祠に息吹の戻りけり〉の句、いずれの句も作者の精神の風景が端的に具象化されている。

春泥に清き言霊拾ひをり 中田 禎子

「春泥から拾った言霊」だから艶っぽいのかと想像したら、「清い言霊」だという。「泥の中の蓮」は清いが、どうも少し違うようだ。自由に味わおう。

〈春一番地球一巡して二番〉の句、「地球一巡」の発想がタイムリーヒットで、「春一番」が駄目押しの一打。

〈春シヨール心の色をまとひけり〉も作者らしい感性の一句。

天網に飛び込みさうな揚雲雀 中島 昌子

春になると雲雀が天高く舞い上がる。揚雲雀である。あまり高く上がりすぎるとそれこそ天網に引つかかるかもしれない。〈もの芽のクエスチオンマークの形をして〉の句は、作者らしいユーモアを感じさせ、〈雪解川ひたすら海へひたすらに〉は、ひたむきさを感じさせる。〈以下略〉